

亜細亜大学課程教育研究紀要

第11号 2023

【書評】

書評：竹内桂著『三木武夫と戦後政治』・・・・・・・・・・菅谷幸浩……………1

【履修生体験記録】

図書館総合演習(1)・・・・・・・・・・	青木 麻里 (都市創造学部)	……………9
図書館総合演習(2)・・・・・・・・・・	佐藤 眞尋 (法学部)	……………10
社会教育実習(1)・・・・・・・・・・	岸本 風音 (国際関係学部)	……………11
社会教育実習(2)・・・・・・・・・・	加藤 千鶴 (国際関係学部)	……………12
教育実習(1)特別支援学校 (中学社会)・・	原田 大樹 (経営学部)	……………13
教育実習(2)高校公民・・・・・・・・・・	佐古岡 駿 (法学部)	……………15
教育実習(3)中学社会・・・・・・・・・・	東 直樹 (法学部)	……………16
教育実習(4)中学英語・・・・・・・・・・	戸田 愛陽 (国際関係学部)	……………18
教育実習(5)高校英語・・・・・・・・・・	田口 茉依 (国際関係学部)	……………20
教育実習(6)高校商業・・・・・・・・・・	竜崎 剛熙 (経営学部)	……………22

【課程基礎データ及び資料】

2022年度 課程履修者数	……………24
2022年度 資格取得者数 (教員免許、司書、社会教育主事)	……………25
2022年度 介護等体験活動実施状況	……………26
2022年度 教育実習先・実習科目一覧	……………27
2022年度及び過年度 卒業生進路一覧	……………28
2022年度 課程科目担当者一覧	……………30
課程運営協議会記録	……………31

【規程類】

亜細亜大学課程教育研究紀要刊行規程及び投稿規程	……………33
-------------------------	---------

Review of "TAKEO MIKI and Post-war Politics" Authored by Kei Takeuchi
Yukihiro SUGAYA

1, 本書の目的と構成

昨年来、自由民主党における派閥と政治資金管理をめぐる問題が政治報道のメインテーマになっている。時代をさかのぼると、1970年代、自民党では「三角大福中」と称された三木武夫、田中角榮、大平正芳、中曽根康弘の率いる各派閥が合従連衡を繰り返す派閥全盛期を迎えていた。

すでに政治学において自民党研究は一つのテーマとして定着しており、実証と理論の両面で様々なアプローチがなされている。近年では1970年代の首相経験者についての評伝的研究も着々と積み重ねられている。

本書は著者が明治大学に提出した博士学位論文をもとにしたものであり、第7代自民党総裁・第66首相である三木武夫の生涯を761頁の厚さで敷衍している。すでに著者は2010年代以降、三木についての論文を多数発表しており、三木研究の第一人者と言っていい。また、三木の元公設秘書・岩野美代治からのヒアリング内容をまとめた『三木武夫秘書回顧録』（吉田書店、2017年）、岩野のメモや手記、日記を翻刻した『三木武夫秘書備忘録』（吉田書店、2020年）を刊行している。いずれも戦後日本政治史を研究する上で重要な文献資料であり、評者もその丹念な仕事ぶりには敬服してきた一人である。

そもそも三木は同時代でもリベラル色の強い「保守傍流」というイメージが強く、首相在任期間は1974年12月から1976年12月までの2年間であった。このため、それ以前に政権を担当した佐藤栄作や田中角榮と比べても、関心の度合いが低いまま推移してきた。こうした研究状況に対し、本書は主として戦後の三木が内政と外交の両面でいかなる取り組みをしたか、多くの史料と証言を踏まえて再検証している。

序章によれば、本書は「政治史の観点から三木武夫を実証的に研究するとともに、戦後政治、特に自民党政治において果たした役割を明らかにし、さらに戦後政治における三木の立場を位置づけることを目的とする」ことで、「戦後政治において三木がいかなる行動をとったのかについての解明と、政治家としての三木の再評価」を試みたものである（2～3頁）。アプローチの手法として、①新党問題や自民党総裁選挙など、「三木の権力政治における関与、対応

の究明」(7頁)、②平和外交や社会福祉、議会政治の在り方など、「三木が主張した政策の検討」(9頁)の二つを掲げている。

本書の構成は以下のとおりである(節と項は省略)。

序章

第Ⅰ部 戦前・戦時期(1907～1945年)

第1章 代議士以前

第2章 少壮議員

第Ⅱ部 「バルカン政治家」の台頭(1945～1955年)

第3章 政党政治家としての出発—協同民主党から国民協同党へ

第4章 中道政権期—政界における台頭

第5章 第二保守党期—保守政治家への道

第Ⅲ部 派閥政治の展開(1956～1972年)

第6章 石橋湛山内閣期

第7章 岸信介内閣期—安保改定への対応

第8章 池田勇人内閣期—高度経済成長と党近代化の推進

第9章 佐藤榮作内閣期—長期政権の主流派から非主流派へ

第Ⅳ部 「三角大福中」の時代(1972～1988年)

第10章 田中角榮内閣期—副総理としての役割

第11章 三木武夫内閣期—椎名裁定と政権運営

第12章 「三木おろし」の政治過程

第13章 福田赳夫・大平正芳内閣期—派閥領袖としての終期

第14章 晩年

終章

2. 概要

第Ⅰ部では三木の政界進出以前から第二次世界大戦終結までの時期を扱っている。明治大学在学中の雄弁部での地方遊説や外遊体験が政治への関心やマスコミを重視する姿勢を作ったことや、初当選した1937年の第20回衆議院議員総選挙では既成政党批判の立場から中立候補として出馬したことを紹介している。東條内閣期の1942年、翼賛選挙の形をとった第21回総選挙では非推薦候補として戦い、当選を果たしている。この時、三木が翼賛政治体制協議会から推薦されなかった理由として、「徳島政界における影響力が、翼賛選挙の段階ではまだ強くなかった」ことや、「三木が地方政治の経験をもたず、前回の総選挙で突如出馬して当選した一年生議員であることを考えれば、当然のこと」と分析している(79頁)。

また、日中戦争期の三木は「日米親善」に努めていたものの、翼賛選挙を境にして反米的な主張を打ち出すようになったことや、翼賛政治会への入会など、戦争協力姿勢を強めていったことを明らかにしている。

第Ⅱ部では占領期から鳩山内閣期までの時期を扱っている。1946年の協同民主党への入党に始まり、翌年の国民協同党への再編、その後の国民民主党、改進黨、日本民主党を経て、1955年の保守合同（日本民主党と自由党の合同による自由民主党結成）に至るまでの期間、三木が抱いていた新党構想や、政界再編への関与、憲法・安全保障観などをたどっている。

1948年の芦田内閣成立時、三木は社会主義と資本主義を折衷した「協同主義」的な中道政党を志向していた。1954年の改進黨の結成過程では農民協同党の参加を促すため、「協同主義」を政策の中心に据えていたが、同年の第25回総選挙以降は「協同主義」を主張しなくなる。1954年の日本民主党結成過程で影響力を発揮することはなかったが、同党に合流後は社会保障の充実を訴えることで、「保守の最左派」（225頁）としての立場を確立していく。

また、1950年代初めの三木は自主防衛を最善と考えながらも、再軍備には慎重であり、国際連合の枠内での集団安全保障を理想としていた。やがて日米安保体制を肯定する姿勢に転換し、1953年には憲法改正と再軍備を分けて捉え、吉田茂の「軽武装・経済優先」路線に近づくようになったことを「三木が中道から保守へと転じるひとつのきっかけ」（216頁）と指摘している。このほか、三木は政策面で十分な一致が見られない中で保守合同に批判的であったことや、首相在任中の鳩山一郎が日ソ国交回復のための訪ソを決意する過程で三木の関与があったことを明らかにしている。

第Ⅲ部では1956年の自民党総裁公選から1972年の佐藤内閣退陣までの時期を扱っている。石橋湛山の総裁公選勝利に貢献した見返りとして、自民党幹事長に就任したことは「自民党内において三木が首班になりうる有力な政治家としての立場を築き上げた」（261頁）意味があると指摘している。この石橋内閣期、三木は国民からの信頼回復のため、派閥解消などを柱とする「党近代化」論を提唱するようになる。

その後、岸内閣成立に伴い、三木派は主流派から非主流派に転落する。三木は安保改定に賛成していたが、新日米安保条約の国会審議過程では「極東」の範囲や日米両国間の事前協議についての統一見解を出すよう、岸信介に要望していた。また、強行採決に見られる岸の強引な政治手法には反発しており、その理由として、「三木自身、国民民主党や改進黨などで野党時代を経験しており、野党との国会審議の重要性を感受していた」（288頁）ことを挙げている。

三木は続く池田内閣成立時にも非主流派に位置していたが、1961年、第二次池田内閣に科学技術庁長官として入閣後は池田勇人に協力し、主流派としての

地位を固めていく。また、自民党第三次組織調査会長就任時は派閥解消に消極的であったものの、1963年提出の最終答申では派閥の「無条件の即時解消」を主張している。また、池田内閣末期になると、後継総裁として佐藤榮作を支持する立場をとり、自民党幹事長として党内調整に果たした役割を評価している。

そして、佐藤内閣前半期、主流派に位置した三木がアジア諸国やアメリカとの関係をどう捉えていたのかを検討したのが第9章である。通産大臣として提唱した「アジア太平洋圏構想」と「東南アジア農業開発基金構想」の内容や、外務大臣として事前協議制の運用や核をめぐる問題にどう向き合ったかを明らかにしている。このうち、「アジア太平洋圏構想」は東アジアでの共産主義拡大の防止を目的としていた点でアメリカのジョンソン政権の構想と重なっていたことや、「かねてから日本が西側の陣営に立ち、東南アジアとの関係強化を訴えてきた三木による構想の一つの完成形であった」（366頁）と評価している。また、三木は核拡散防止条約の早期調印を目指していたが、「アメリカの核抑止力に頼る以外に、日本の安全保障は確保できない」と判断していた点で、「核政策についても三木は現実主義者であった」と位置付けている（397頁）。さらに沖縄返還の方式として「核抜き・本土並み」が望ましいことを世論に定着させた功績を評価している。

三木は1968年の総裁選に敗北して非主流派に戻ると、「党近代化」や外交問題についての提言を打ち出すようになる。その一環として、中国問題については、それまで「二つの中国」論に基づく「政経分離」の立場をとっていたが、1971年以降は中華人民共和国を中国の正統政府として承認する姿勢に大きく転換していったことを指摘している。

第IV部では1972年の田中内閣成立から1988年の死去までの期間を扱っている。三木は田中内閣に副総理として入閣したことで主流派に復帰するが、1974年、第10回参議院議員選挙における徳島選挙区での選挙戦（「阿波戦争」）をめぐって田中角栄と対立し、副総理を辞任する。以後、田中への批判を強め、「党近代化」に向けた提言を重ねたことが椎名裁定による三木内閣成立につながる。インフレ克服や政治倫理の確立など、内政重視の政権運営に努めるが、最後まで政権基盤の脆弱性を払拭できなかったことを明らかにしている。

その後、三木が福田・大平内閣期、派閥領袖として総裁選や政界浄化、党内抗争にどう向き合ったのかを分析したのが第13章である。1980年の大平内閣不信任決議案の採決に欠席しながら、離党を選ばなかったことを「政党政治家三木武夫にとって最大の矛盾した行動」（676頁）と批判している。三木の影響力は同年に三木派解散が決定したことで低下していくが、1982年のロッキード判決以降、自民党の金権体質是正や政治倫理の確立を強く訴えるようになる。1983年の国際軍縮促進議員連盟会長就任を取り上げた第14章では、三木が軍縮や平和

を志向しつつも、「日本がアメリカの核の傘に守られている点を十分に理解するとともに、非核三原則にある『持ち込ませず』が実行困難であることも十分にわかっていた」（703頁）と指摘している。

終章では、「三木は現実と理想のバランスをはかり、理想主義的な政策の実行を目指しながらも、理想よりも現実を優先させる政治家」であったことや、その結果、「政界実力者にみられる矛盾した行動や主張を、派閥の領袖だった三木も免れることはできなかった」と指摘している（718頁）。ただし、国民の福祉向上や対アジア関係、世界平和についての理想は一貫して持ち続けていたことや、「権力政治の中心にありながら、議会政治のあり方を継続的に研究したことに、三木が戦後日本政治史において果たした重要な役割がある」（721頁）と結論付けている。

3, 本書の評価

以上、760頁を超える本書の内容を要約してみたが、三木自身の理想と現実がいかなるものだったか、内政と外交の展開に合わせ、広い時期にわたって検討していることがわかる。著者自身が明治大学史資料センター所蔵「三木武夫関係資料」の整理に従事しており、その成果も本書における実証性の高さに反映されている。頁数としては三木が自民党政治家としてのキャリアを積んでいく第Ⅲ部が最も厚く、三木内閣期を取り上げた第Ⅳ部の前史としての役割をしっかりと果たしている。

ここで本書の意義を評者なりに大きく五点に分けて述べてみたい。

第一は非主流派に位置した政治家の政治行動はどのようなものだったか、という事例研究としての価値である。著者が述べているように、「戦後政治のなかで、三木は改進黨時代から福祉政策の充実、自民党となっても早くから派閥解消や党の近代化などを主張してきた」ため、「『革新派』、あるいは保守のなかの進歩派として位置づけられ、自らも市の地位を自負していた」（425頁）。本書はこうした従来のイメージに代わり、三木が様々な局面ごとに政治姿勢を巧みに調整していたことを明らかにしている。これは与党政治家として、政府・与党内での立場の変化を考えれば当然のことである。特に三木は自民党内で非主流派に位置した期間が長かった。本書ではその三木が自らの政治的影響力をどのように維持しようとしていたのか、政治情勢の判断と方針の転換などを一つずつ分析している点は政治史の研究として高く評価できる。著者は序章で、「三木にとって政治とは何よりも権力闘争への対応を意味した」（3頁）と述べており、本書全体がこの問題関心に沿う形で構成されている。

特に評者の目にとまったのは、「岸内内閣期における三木の自民党からの離党と新党結成の断念は、自民党が結党されて五年ほどの段階で、三木のような

かつての保守二党論者にとっても離党が困難になっていたことを意味する。改めて自民党の結成が保守勢力を『結束』させる効果があったことを確認できる」(291頁)との指摘であり、卓見と言えるだろう。

第二は「党近代化」に向けた三木の考えを石橋内閣期にまで遡り、整理・分析したことである。特に第三次組織調査会長時代を取り上げた第8章は大変充実した内容になっている。三木内閣前史であるⅡ部からは、三木がときの政権や党内での自らの立場、経済・社会情勢も踏まえ、どのような問題関心に立脚していたのか、その考えの変遷をたどることができる。池田内閣期、中産階級の育成にこだわった事実と並んで、「党近代化」は三木の重要なテーマであったことを本書から教えられた。三木にとって「党近代化」論は将来の首相候補として自らの存在をアピールする面もあったのではないかと感じた次第である。

第三は日本の安全保障を三木がどう捉えていたのか、理想と現実の矛盾も含めて解明したことである。第5章にあるように、占領期の三木が自主防衛を最善としつつも、再軍備の実行は困難であり、最終的には吉田茂と同様、日米安保体制を受容する立場に帰着した。日本国憲法を改正しないかぎり、再軍備はできないという三木の考えは、今日の憲法論議に照らしても重要な意味を持つと言えるだろう。

その一方、本書では三木が事前協議制に実行性を持たせることにこだわっていたことや、「非核三原則の厳格な解釈を確立させたものの、三木は核持ち込みの可能性を排除していなかった」(399頁)ことを強調している。著者は佐藤内閣外務大臣時代、「三木が核持ち込みを認めないとしたのは、自民党総裁選への出馬を検討しており、世論を意識したから」であり、実際には「アメリカの核抑止力への依存」を容認していた点で「保守政治家の枠を出ることはなかった」とし、「保守政治家のなかでの先進的な平和主義者」と位置付けている(400頁)。これまで日米両国間で事前協議が開催されたことは一度もないが、制度としての弾力的な運用を三木が期待していたことは興味深い。この事前協議制をめぐる問題は、沖縄返還問題と合わせ、三木の「現実主義者」としての側面を知る上で重要な意味がある。これまでのイメージを大きく塗り替えるものと評価できるだろう。

第四は中国問題に関する三木の見方がどのように変化していったか、特に1968年の自民党総裁選敗北後、非主流派に転じた時期に焦点を当てて分析したことである。本書によれば、もともと三木は中華民国(台湾)を中国の正統政府と位置付けていたが、貿易関係強化を図るため、中華人民共和国を国家として承認しなければならないという意識も抱いていた。そして、佐藤内閣後半期になると、台湾は中華人民共和国の一部であり、日華平和条約を廃棄すべきと

いう主張に転換する。著者はその理由を、「来るべき総裁選では中国問題が争点の一つとなると踏み、最大のライバルと目していた福田〔赳夫〕との中国政策の相違を明確にし、国交正常化を実現できる政治家として総裁選に臨む方策を抱いていた」（463頁）と指摘している。1970年代を通じて中国問題は日本外交の重要なテーマであり、三木も含め、自民党の派閥領袖が対中国政策を国内政局と関連付けて理解していたことを示している。

第五は三木内閣における政権基盤の脆弱性をもたらした最大の原因を「主流派の結束の弱さ」に求めていることである。「三木派は、田中派や大平派などと比べると相対的に勢力は少ないものの、派閥の面では弱小とまでは言い切れない勢力だった」ことや、「三木は福田派と中曽根派を主流としていたものの、田中派と大平派は非主流派であり、他の派閥も含め、主流派が非主流派を圧倒するものではなかった。加えて、主流派の結束も強固ではなかった」ことを指摘している（589頁）。従来、三木内閣期の政局については、少数派閥としての三木派と大派閥である田中派の対立関係を強調する見方が強かっただけに、この指摘は本書の新規性と言える。派閥均衡人事の問題点を知るための事例になるだろう。

しかし、より掘り下げた検討が必要であったと思われる点もいくつかあるので付記しておく。

第一は日中戦争期の三木が1939年に「親軍的な性格を有する会派であった」（72頁）時局同志会に参加した理由である。1940年、民政党代議士・斎藤隆夫の「支那事変処理に関する質問演説」が問題化した際、三木は時局同志会の方針に従い、議員除名処分に賛成する立場に回っている。著者はその理由として、「三木は一年生議員だったため、棄権や反対はできなかったのだろう」（74頁）と推測している。この説明を踏まえると、時局同志会への参加も消極的な動機からだったと見ていいのか、気になったところである。

第二は石橋内閣期末、三木が岸信介を後継総裁に擁立するために動いた理由が判然としなかった。当時、三木と石橋は政治姿勢に明確な違いがあったはずだが、これは自民党幹事長の立場としてはやむを得ないことだったのか。著者は三木が1957年に自民党政調会長に就任した理由として、「岸への強い警戒心を抱いており、党の政策立案に関与することで岸を牽制する意図もあった」（271頁）と述べている。こうした意識は岸擁立の過程でもあったのだろうか。著者の見解を知りたい。

第三は三木内閣が1976年11月5日に閣議決定した防衛費対GNP（国民総生産）1%枠についての説明が乏しいことである。これはその後の日本の安全保障政策を大きく規定する一因になっただけに、具体的な理由説明が欲しかった。三木は1975年1月の施政方針演説で、「防衛力は自衛のためアジア諸国

に脅威を与えない」ことや、「戦争防止の観点から日米間の安保協力と自衛隊の存在を『評価』する」旨を表明している（567頁）。これは翌年の閣議決定にどう関わっているかを指摘してもよかったのではないか。この時期における三木の安全保障観を基盤的防衛力整備構想にかかわった高坂正堯や、同時期の自民党派閥領袖である中曾根康弘と比較すれば、議論の裾野が広がったように思う。

第四は退陣後の三木が河本敏夫の総裁選出馬や大平内閣への入閣を後押しした理由が判然としなかった。第13章では1978年の総裁選出馬に消極的な河本を三木が後押ししていた姿が描かれているが、そこで河本が掲げた政策や、三木と河本の関係などについて、具体的に説明したほうが読者にとってはわかりやすかったように感じた。

以上、本書の内容について評者なりの私見を述べた。評伝の特徴はどうしても顕彰的意味合いが強くなりがちなどころにあるが、本書では三木の限界や矛盾にも言及している点でバランスを保っている。外交記録も含め、一次史料を広く渉猟した上で、三木が現実の政治過程の中で自らが最善と信じたものを模索する政治家であったことを遺憾なく示す内容に仕上がっている。今後の著者による研究の発展を祈念しつつ、これから戦後日本の政治外交を学ぼうという学生にも一読を勧めたい。

（吉田書店、2023年2月刊行、761頁、定価8,000円）

私が図書館総合演習の授業を受けて、印象に残った3点について振り返っていきます。

1つ目は、亜細亜大学図書館を見学させていただいたことです。図書館自体は何度も利用したことがあったのですが、貴重書室や地下の書庫など、初めて入った場所も多くありました。特に貴重書室は今回のような機会がないと入れないということで、とても貴重な機会となりました。また、棚の配架の際図書資料を少し下げる工夫について、正直気付いたことがありませんでした。利用者のことを考えてくださった工夫ですが、私のように気づいていない人のほうが多いと思います。しかし、日本は地震が多いため利用者には気付かれない工夫でも命に関わるようなことになるので、とてもありがたいと思いました。

一方で、今回の見学でとても良い施設なのに、知られていないことが多いと感じました。それらを認知させることが今後の課題として挙げられると思います。

2つ目は、学生選書を行わせていただいたことです。実際に自分が書店で選んだ本を亜細亜大学図書館の蔵書として受け入れていただくという経験はこの授業でないとできない、貴重な経験だったと思います。選んだ本を大学のお金で買っていただくため、学生みんなに喜んでもらえるような、ためになるような本を選ぶよう心掛けました。

その後たくさんの人に手に取ってもらえるようポップ作成を行いました。普段ポップを作ることはないし、本によってイメージが違うので、作成には少し時間がかかりました。しかし手描きのものやPCでカラージュしたものなど、私なりに工夫をして作りました。棚の前を通る人の目に留まるよ

うなものが作れたと思います。最後にフィルム掛けをし、分類記号のシールを貼り、配架まで自分たちの手で行いました。この一連の流れを口頭で学ぶだけでなく、実際に行えたことがとても面白かったし有意義なものになりました。

3つ目は武蔵野プレイスを見学させていただいたことです。私の地元の図書館に比べると規模も大きく、図書館としての機能だけでなく、様々な用途で利用されていてとても興味深かったです。

特に子どもから大人まで同じ空間にいられる空間はとても良い工夫だと感じました。1階のカフェや、市民活動を行っている階が吹抜けでつながっているので、無音が当たり前であるはずの図書館で話し声が聞こえるのは新鮮でした。小さい子にも「静かにして」と言わずに楽しんでもらえるのも、図書館や本というものが楽しいと思ってもらえる工夫だと感じます。また、ティーンズ専用のフロアもあり、ティーンズ以外の立ち入りを禁止し、最低限の大人しかいないという空間を作ってくれているのは良いなと思いました。公共図書館という誰でも利用できる施設でどの年齢でも、学生同士でも家族連れでも楽しく利用できる空間づくりができていることが素晴らしいと感じました。

今回の図書館総合演習で、図書館での業務を実際に体験させていただいたり、亜細亜大学図書館や武蔵野プレイスを見学し、そこで働いている方にお話を聞かせていただいて、とても有意義な講義を受けさせていただきました。また、様々な方にご協力いただいてこのような経験が出来ました。最後になりますが、貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

私は、図書館総合演習を通して図書館の業務についての理解を深めることができました。特に印象に残った3つについて述べたいと思います。

まず1つ目は図書館見学です。本講義では亜細亜大学図書館と武蔵野プレイスを見学しました。大学図書館では全てのフロアを案内してもらいました。普段見ることのできない貴重書の類を見せてもらったり、配架の工夫を教えていただいたり、とてもよい経験になりました。また、武蔵野プレイスを案内してもらった中で気づいたことがいくつかありました。まず、地下2階には19歳以下の青少年が勉強したり、ゲームをしたりできるスペースがあり、そこは従来の図書館と比べて賑わっていました。同じ階に、アート・ティーンズライブラリーと呼ばれる図書や雑誌の置かれたスペースがありました。この2つのスペースが扉により区切られていたのですが、なんと、この扉により、青少年の賑やかな音を遮ることができ、利用する全ての人が過ごしやすい環境づくりができていますと感じました。また、フロアの八角に丸みがあったため圧迫感を感じない空間だと思いました。カウンターの裏も案内していただきましたが、返却口の裏での作業や1日の仕事内容なども知ることができました。私は図書館学課程をとっていないながら、あまり図書館を利用したことがなかったのですが、今回の見学を通して設備・資料が充実していると思ったので、今後はもっと活用していこうと思いました。

2つ目は学生選書です。紀伊國屋書店国分寺店にて、亜細亜大学図書館に蔵書として受け入れたい本を選ぶという経験をさせていただきました。本を選ぶにあたって、大学図書館を利用する多くの人に読んで欲しい本を選ぶように意識しました。私自

身、最近は電子書籍を読むことが多く、紙媒体の本を手にするのは久しぶりでした。目を惹く本ばかりで、どの本を大学図書館に入れようかととても悩みました。今回の学生選書では最終的に6冊の本を選びましたが、そのうちの3冊には選書をした際の私の状態が少し影響しています。当時、私には悩んでいることがありました。そんな私の心を軽くしてくれそうな本を見つけ、私と同じように悩んでいる人がこの本を読んで少しでも楽になってくれたら嬉しいなと思い、今回の学生選書の機会で大学図書館に入れてもらいました。他にも「表紙に惹かれた。」「帯に惹かれた。」など、内容以外で選んだ本もありましたが、今回の学生選書を通して、表紙や帯含めて1冊の本なのだと感じました。後日、他の受講生の前で選んだ本についてプレゼンをする時間がありましたが、自分なりに選んだ本の魅力を伝えることができたように感じます。

3つ目はPOP作成です。POP作りの経験はなく、芸術的センスも乏しかったため、どのようにして本の魅力を伝えればいいのかととても悩みました。色紙や色鉛筆、絵の具などの材料を駆使して、少しでも図書館利用者の目を惹くPOPを作るように意識しました。POPが完成し、自分たちが選んだ本にブックカバー等をつける作業をし、コーナーに展示されているのを見た時は、達成感が溢れました。すでに自分の選んだ本が何冊か借りられていて、頑張っよかったなと思いました。

この講義を通して自分で実際に業務を体験することで、図書が棚に並ぶまでの過程をより深く知ることができました。最後に安形先生をはじめ、協力してくださった図書館員の皆さま、紀伊國屋書店の皆さま、本当にありがとうございました。

社会教育実習を経て

国際関係学部 多文化コミュニケーション学科 4年

岸本 風音

1. 実習までの準備

私の社会教育実習は5日間国立赤城青少年交流の家で行われた教育事業の一つである「あかぎ防災キャンプ」に実習生として参加した。私は社会教育実習に参加するにあたり、社会教育特講Ⅰ・Ⅱや社会教育実践演習で学んだ社会教育施設の内容を踏まえたうえで、①実際に社会教育施設での生活や事業に携わり、青少年との関わりや交流を通じて現状を把握すること。②座学としてだけではなく実際の現場の状況についての理解を深めつつ、国立赤城青少年交流の家の施設運営や青少年教育施設の実態について学び知ること。③防災についての知識習得を目的に掲げた。

2. 実習中の出来事

実習初日と2日目は青少年施設で行われている事業や施設管理・運営体制について、職員の方による講義を受けた。普段働いている方々から直接話を伺うという経験自体が非常に貴重であると感じた。大学の講義で学んだ知識よりも詳細かつ実体験を踏まえた講習内容であったため、その後の防災キャンプや実習に生かそうとメモを取りながら講習を受けた。

3日目と4日目は中学生の参加者を支えるボランティアとして、「あかぎ防災キャンプ」に参加した。大学教授による防災講義を受講し、防災への備えとして地震体験車への乗車や避難所・非常用簡易トイレの開設、段ボールベッドやテントの組み立て作業、野外炊事体験等を行い、年齢性別関係なく災害時に実践出来るようなプログラムを参加者とともに行った。特にゲームを通して防災対策を学ぶHUG風水害編は参加者から好評であった。5日目は職員の方に向けて実習の発表を行い、フィードバックをいただいた。

3. 実習を通して学んだこと

職員による講義の中で、赤城青少年交流の家は小・中学校、高等学校や群馬大学から出向している職員が共に働いており、施設の運営体制が独特であることに関心を抱いた。利用者側として使用した経験のある方が各部署に分かれて働くことで、施設利用者や利用団体のニーズへの受け答えがよりスムーズになっており、有益かつ有意義な研修支援の場として、教育事業における学習や体験の提供へと繋がっている点に気付くことができた。そして、施設運営体制において各事業や支援、業務を円滑に行っていく上での利用者数や利用状況の細やかな情報伝達や、要望等に対する共有など、並行して行われる業務が混合しないよう、日々の連携が重要となることを学んだ。「あかぎ防災キャンプ」では、参加者である中学生との関わりやプログラム進行の中で、中学生たちが協力・協働することの重要性を理解して行動していた事に気が付いた。これは私自身にとって新たな発見となった。

4. 後輩へ伝えたいこと

今回の実習で最も痛感したことは、他のボランティアとの経験値の違いから来る参加者との関わり方であった。社会教育や施設についての知識はあっても、実際現場の状況を目の当たりにした際に、何をどう行動すれば良いのかについて、周りの方を模範にするしかないことを再認識させられたからである。直接的でなくても様々な活動に携わり異なる世代間との交流を日常的に増やしていくなどは、社会教育の分野に限らず、子どもや高齢者など幅広い世代と関わりあえる経験値を高めていくために非常に重要であると、今回の実習を通してより実感することができた。

子供たちと一緒に成長できる時間

都市創造学部都市創造学科 4年

加藤 千鶴

1. 実習までの準備

大学3年生の夏季休暇中に、国立赤城青少年交流の家で行われた中学1、2年生が対象の防災キャンプに実習生として参加した。実習を行うにあたり、5日間で学び、身につけたいことを事前に3つ考えた。1つは、教科書では分からない現場でのリアルを体感すること。2つ目は、防災をテーマに、子供の学びの意欲を向上させるために、工夫すべき指導のポイントは何かを学ぶこと。そして3つ目は、スタッフの持つべき視点と意識とは何かを学ぶこと。これらについて、実習後の心境の変化と共に、以下の項目について述べていく。

2. 実習中の出来事、実習を通して学んだこと

まず、1つ目について述べる。所長から5日間の実習に向けての心得などについてお話をいただき、その中で、施設の経営や管理に携わる部署について知ることの必要性を学んだ。これにより、表向きの仕事を受け持つ事業担当者だけでなく、裏方の仕事を受け持つ担当者することも知り、施設の実態への理解を深めることができた。利用者と直接関わるか否かに関係なく、施設の職員全員が、「青少年・子供たちのために」を念頭に活動していることがより分かり、職員全体が彼らの体験の場・サードプレイス・自己表現できる場・認められる場を創り上げていることが分かった。

次に、2つ目について述べる。実習2日目、防災キャンプ初日に、講師の方が、「誰もが防災への意識はありながらも、実際の防災時に役立つ心構えがなっていない」と話されていた。これは、普段の日常生活から主体的に思いやりを持って行動しなければ意味がないということで、例えば、家事手伝いや公共交通機関で席を譲るなど、具体的な行動に移すことが最も必要だというものだ。一方的に、災害時の動きについて話すのではなく、日常生活に落とし込み、身近な点から気づきを促そうとする点が、子供たちの学びの意欲をより向

上させていると感じた。他のプログラムでは、風水害を想定し、避難所の運営を子供たちが役割を分担してゲームを行ったが、これにおいても、子供たちの主体性と行動力を成長させるに適したものであった。進んで学ぶ子供たちの生き生きとした姿には、一種の感動を覚えた。

最後に、3つ目について述べる。私たちの立場が参加者を支援するボランティアだという事を常に忘れず、子供たちが主役であることを念頭に、サポートに徹底することを最も意識した。子供たちの成長を促せるよう、遠くから見守りつつも、誤った行動には正しく指導を行い、そしてコミュニケーションを絶やさないこと、それこそがスタッフに求められる力であると学んだ。これを実践するために、私は、担当のグループの子供たちの発言や行動を毎日記録して、彼らの性格や考えに準じた声掛けやサポートを行った。例えば、自己中心的に次から次へと先に行動する子には、他の子の作業を手伝うように伝えたり、作業が周りよりもゆっくりな子には「丁寧だね」と声を掛けたりした。一見、弱点とされるものを強みとして捉え、伸ばしていくことが、成長を促すのに必要だと考えたからだ。

3. 後輩へ伝えたいこと

このように、5日間の実習を経て、青少年教育施設、そしてボランティアの存在が、子供たちの成長にとって有益なものであることを身に染みて感じたと共に、子供たちの人間力を、身近で育む役割を担うからこそ大きな責任を背負うという、厳しい一面があることも学んだ。とはいえ、自分の力に、子供たち一人ひとりの持つ強みを引き出すことのできる、あらゆる人や自然や学びと出会う機会を届けられる可能性を秘めているという点こそ、宿泊実習だからこそその良さがあると考え。ぜひ、皆さんには、子供たちと共に生活し、身近で彼らの成長を見守ってほしいと思う。

私の教育実習

経営学部経営学科 4年

原田 大樹

1. 実習までの準備

教育実習開始の三週間前に実習校で打ち合わせを行いました。実習校は母校であり、卒業式以来何度かお伺いしましたが、公私混同せず、実習を受け入れていただけることに対する感謝を抱きながら、誠意を持って打ち合わせに臨むように心掛けました。

まず、教務部の先生より教育実習における流れや諸注意、行事についての確認を行いました。その後、指導教諭の先生と個別で打ち合わせを行い、実習中の授業範囲や担当する学年、クラスについて確認しました。事前に希望する学年や教科を出しており、どの学年を担当するかどうかは大体見据えていたつもりだったのですが、実際は授業においては中学三年生の社会（歴史的分野）と高校三年生の政治経済と、二つの学年を担当することになったため、非常に驚きました。ただ、授業範囲は確定しており、「範囲を変えることはない」と先生より断言していただいたので、実習開始までの三週間は全力で教材研究に励むようにしました。

2. 実習中の出来事

実習初日から中学三年生の修学旅行で、担当する学年も指導教諭の先生も不在という状況の下で実習が開始しました。実習一週目は社会科の授業（中学社会、高校地歴公民）を中心に授業参観を行いました。また、空き時間を使って実習二週目から開始する授業実践の準備も進めました。実習三日目より担当する学年と指導教諭の先生が戻ってきたので、担当する学年を中心に授業参観を行い、生徒の顔と名前をしっかりと覚えるようにし、性格を大まかに把握するように努めました。生徒とできるだけ交流を深めたいという一心により、実習中に行われる部活動に全て参加させていただき、部活動指導も行いました。

実習二週目より、SHRや指導教諭の先生が担当している教科（自立活動を除く）をそのまま私

が担当するという形で本格的に授業実践が開始しました。上手く授業ができたと思ったこともあれば、時間が足りず、途中で終わってしまったこともありました。特に授業構成の部分で非常に悩みました。私の場合は一方通行な授業になってしまうことは必ず避けたいと思っていましたので、話し合いの時間を設けたり、発問の数を増やしたりのように工夫を取り入れるようにしました。ただ、中学生と高校生の両方とも担当していたため、授業の切り替えが一番難しかったです。とにかく、私にとっての最低限の目標であった「笑顔を貫き、楽しく授業を進めていくこと」だけはしっかり守るようにしました。授業実践が終わるたびに、指導教諭の先生から具体的なフィードバックをいただいたので、そのフィードバックの中で、次の時間までに必ず一つ以上取り入れるようにしました。

そして、実習三週目に迎えた研究授業では多くの先生方に授業参観していただき、非常に緊張しましたが、生徒からの想定外の答えが出てきたり、積極的に発言していただいたりのように生徒に救われる場面が多かったように感じられました。これらの経験を通して、授業は教師だけが作るものではなく、生徒とともに作り上げていくものであると実感しました。最終日には丸一時間を使ってサプライズされ、担当学年（中学三年生）の生徒たちより色紙を頂くことができ、嬉しい思い出になったとともに私にとってのかけがえのない財産にもなりました。

3. 実習を通して学んだこと・感じたこと

今回の教育実習を通して学んだことは、先述した通りに「授業は教師だけが作るものではなく、生徒とともに作り上げていくものである」ということです。対話学習を積極的に取り入れることになると生徒の意見なしでは授業を進めることが難しくなるため、どういう発問が適切であるかについてしっかり考慮しなければならない状況でした。

実際に授業で考えた発問を投げかけてみると反応が良く、活発な意見交換が行われたクラスもあれば、反応が薄く、ところどころにアドバイスやヒントが必要になる場面があったクラスもありました。これらの経験を通して、同じ授業でも生徒の反応や回答が異なる場合もあるということを学ぶことができました。クラスによって発問の仕方や授業の進め方を変えていくことも一つの手であると学ぶとともに現職の先生方の巧みな授業運びに感銘を受けました。

4. 聴者とろう・難聴者の「聴き方」の違い

「聴く」という言葉は「理解しようと自ら進んで耳を傾ける」という意味が込められています。その言葉自体は聴者とろう・難聴者にとっては同じ意味です。ただ、「聴き方」になると全く異なってきます。聴者の「聴き方」は、耳に入ってくる情報で理解しようとするものであると思います。一方で、ろう・難聴者にとっての「聴き方」は一人ひとりによって異なってきます。聴力や聞こえ方次第では、聴者と同じように耳で情報を得て理解する人もいれば、全く聞こえなく、目で情報を得て理解する人もいます。ろう学校に通っている生徒のほとんどは目で情報を得て理解しようとしています。そこで、授業で非常に大切になってくるものとして視覚情報が挙げられます。

授業における視覚情報の代表的な例として PowerPoint が挙げられます。手話で授業を進めていくため、生徒がノートを取っている間は先生の話を見ることが難しくなります。情報が流れないようにするためには PowerPoint を用意することが必要となります。また、大切なところは赤字で強調する、イメージを持ちやすくするために画像を貼付するといったような細かい工夫も必要となります。私は上記の点についてかなり意識しながら教材作成に取り掛かりました。

また、他の先生方に指摘されて気づいたことは、ろう学校に通う生徒の中には漢字の読み方が苦手な生徒が多いことです。生徒のほとんどは目で視覚情報を得ているため、漢字の読み方が分からないということが多くなっています。そのため、国語科だけではなく他の教科でも漢字の読み方を確認する先生が多くなっているということでした。

思い返してみると私のときも、国語の授業でもないのでにもかかわらず漢字の読み方をよく確認させられていたと改めて実感しました。漢字の読み方の確認を良く行っていたのはこういうことであつたのだと過去と現在の経験を結びつけて気付くことができました。

実習を通じて、ろう学校では特に視覚情報が大切になってくることを改めて実感するとともに漢字の読み方の確認などのように補助しなければいけないものも存在するというのを学びました。

このようにして、ICT教育が推進されている現在において、視覚情報は特別支援学校に限らず、一般的な学校でも必要になってくるのではないかと感じています。

5. 後輩へ伝えたいこと

教師という職業は他の職種・職業とは違って人と関わる場面がかなり多くなっています。そのため、先生方や生徒たちと積極的にコミュニケーションを図るようにして欲しいです。実習中は授業準備（教材研究や教材作成）などで大変になるとは思いますが、生徒たちと多く関われば関わるほど授業が比較的円滑に進むことができるようになるので、積極的に生徒たちと関わるようにしていくことを強くお勧めします。私の場合は出来るだけ空き時間や放課後（生徒下校後）の時間を使って授業準備を行いました。昼休みには教室や体育館、グラウンドに行き、積極的に生徒と交流するようにしました。また、部活動指導に全て参加していたので、授業準備は直前に出来上がるという状況がほとんどでした。それでも、生徒と関わることを最優先にして良かったと今でも思っています。ただ、大学でやってきたこと（模擬授業等）が実習では通用しなかったということもありましたので、これまでの大学での学びが全てだと思わず、実習に臨んで欲しいです。予期せぬ出来事に直面するのも教育実習ならではの醍醐味でもあると思います。

教育実習は教職課程を履修している人しかできない経験であり、直接生徒と関わるができる貴重な経験にもなります。ですので、後輩の皆さんも2～3週間の貴重な教育実習を楽しみながら有意義に過ごして欲しいと思います。

実習期間で得たもの

法学部法律学科 4 年

佐古岡 駿

1. 実習が始まるまで

まず、実習先の高校が東京ではなかったため、宿泊先の確保などの準備を両親と相談しながら進めた。私の場合は稀なケースではあるが、保護者とも相談をしておくことが重要である。

実習校の打ち合わせは実習開始の一週間前の金曜日に一回のみ。実習についての確認を行い、指導教諭の先生とクラス担任の先生と細かい打ち合わせを行った。ここで自分が担当する授業範囲を教えてもらい、教科書や資料集などをお借りして授業準備に取り掛かった。教科書などは大学での講義で使用したものと違う出版社のものを使用したため、予想していた範囲と違うことがあるので注意が必要だと感じた。3 クラス 3 回ずつの指導案をまとめて作ってきたとの指示が出たため、ほぼ 2 日で 3 回分の指導案を作ることになり、かなり大変だった。

2. 実習中の出来事

実習の最初の 3 日間は授業見学と指導案の修正がメインで、社会科を中心に参観を行った。4 日目から実際に教壇に立ち授業を行うが、慣れない作業と緊張でグダグダな感じに。また、指導教諭の先生のやり方に合わせた指導案を作成したため、進め方がとても難しかった。徐々に回数を重ねていくにつれ、落ち着きは出てきたが、全体通して課題は多かったと感じている。

研究授業では 20 人以上の先生方や同じ実習生に参観していただき、良かった点と改善点を様々な視点から得ることが出来た。

実習後半は生徒とも仲良くなってきて、気持ち的にも余裕が出来た。最終日には寄せ書きをいただき、心に残る思い出が出来た。

3. 実習から実感したこと

実習前は ICT 機器を用いた授業を想定し、PPT などを使った授業などを模擬授業で行ったが、実

際は板書と口頭での説明、ペアワークといった話し合いを取り入れるという授業形態だった。公民科は ICT よりも板書と説明がメインになる可能性が高い。しかし、実習後に他の実習生と授業内容を共有した際、視覚的な教材や書く作業を加えるといったやり方を取り入れることが必要になると感じた。指導教諭の先生に合わせる形になると思われるが、自分なりに考えたやり方とすり合わせをして授業準備をすることが実習中は重要になる。授業作成の際は、多くの人のアドバイスや授業の進め方を参考にし、授業の幅を広げていくとやりやすくなるかと思う。

4. 後輩へのメッセージ

授業に関しては、指導教諭の先生と話し合い、先生のやり方と自分がやりたいことのすり合わせをすることで、授業がスムーズになると思います。授業後はアドバイスをしっかり聞き、次の授業に向けて改善をしていく事を大切にしてほしいです。

実習の話でよくあるのが「全然寝る時間がなかった」という話ですが、無理をして夜遅くまで準備をする必要は無いと考えています。空きコマ全部に授業見学を入れなくていいので、空いた時間で準備をする、家で出来る作業は家で行うなど、時間の使い方を工夫すると睡眠時間は確保できます。実習中は健康が第一なので、無理せずに頑張ってください。

最後に、一番思い出に残り、楽しいと感じたのは生徒たちと接することでした。これ先生という職業のやりがいだと感じました。どんどんコミュニケーションをとっていくと、生徒も授業に集中してくれるし、笑い話も出来ました。生徒と生活する機会は大変貴重です。沢山接する時間を作って、楽しんで生徒と関わって欲しいと思います(もちろんメリハリは必要ですが)。

短い期間ではありますが、有意義な体験になると思いますので、是非頑張ってください。

私の教育実習

法学部法律学科 4 年

東 直樹

1. 実習までの準備

教育実習開始の二週間前に実習校で事前打ち合わせを行いました。事前打ち合わせでは、校長先生、教頭先生、教務主任の先生方に挨拶をした後、諸注意と細かい連絡事項の確認をしました。その後、指導教諭の先生とクラス担任の先生と挨拶をし、時間割・授業内容・学年・クラスについて確認しました。実習までの期間は、自宅で事前打ち合わせの際に渡された教科書・資料集・指導書を使用して教材研究に励みました。私は中学校1年生の歴史を担当することになったため、中学校の教科書のみならず、高校のときに使用した日本史の教科書も活用して、授業をするうえでの知識を増やし、教材研究をしていました。

2. 実習中の出来事

実習1週目は、全校朝会で自己紹介をし、授業時間は自分の担当する1年生のクラスを中心に授業の参観を行いました。積極的に先生方に声をかけたことで他学年の社会科以外の授業もたくさん参観することができ、授業の進め方や学年、クラスによって異なる生徒の反応は、とても勉強になりました。

実習1週目の3日目からは実際に自分が授業を行いました。最初の授業は、緊張やPowerPointに載せた動画が流れないなど授業を上手く進めることができませんでした。また、エアコンが修理中で教室内に扇風機が何台か設置されていたため、自分が思っている以上に大きな声ではっきり話す必要があることも分かりました。最初は中々上手くできなかった授業も、指導教諭の先生や校長先生をはじめ何人もの先生にご指導いただいたおかげで少しずつ自分の目指す授業に近づけることができました。指導教諭の先生と一緒に、社会科を暗記にすることなく、「生徒になぜ?を考えさせる授業」を常に目指して授業づくりをしてきました。PowerPointでの資料の掲示方法や話し合いの発

問・ヒントは工夫することができました。

実習2週目は、部活動の新人戦があったため、午前は自習監督をし、午後は授業づくりをしていました。

実習3週目は、学校行事である体育祭がありました。応援団の活動など学校行事を通して生徒と関わることができ、体育祭に向けてクラスに対しての担任の先生の声掛けはとても参考になりました。自分自身も大縄の回し手の経験があったため、積極的に教えることができ、生徒からは「大縄の師匠」と呼んでもらえ、クラスの生徒との信頼関係もより深めることができました。

研究授業は、グループでの話し合いの時間で活発に話し合いが進まなかったという課題があったものの、生徒から出た考え・意見を活かして授業をすることができ、実習の成果を十分に発揮できました。特に、研究授業の内容が天平文化だったこともあり、実際に自分が中学生のときに修学旅行で京都に行ったときの東大寺のチケットやおみやげとして購入した興福寺の阿修羅像のクリアファイルなどを見せたことで、生徒の興味・関心を高めることができました。実習最終日は、道徳の授業も行い、チャレンジすることの大切さについて、生徒自身の考えを引き出し、グループで意見交換し、発表するという授業を行いました。生徒一人一人の考えや意見を尊重した授業ができたと考えます。

実習最終日のホームルームの時間では、担当クラスの生徒・担任の先生からメッセージ入りのメダルをいただくことができ、とてもうれしい思い出となりました。

3. 実習を通して学んだこと

今回の教育実習を通して学んだことは、教師は生徒とともに学び・成長することが大切だということです。教師自身も授業を常に生徒が理解しやすいものになるように、教材研究や授業のやり方

を工夫していく必要があると強く感じました。ただ漠然と授業を行うのではなく、きちんと目的を持って授業を作ることの大切さも実習を通して学びました。実習中の授業づくりでは、社会科の面白さを生徒に伝えることを大切にし、「生徒になぜ?を考えさせる授業」を目標にして、授業づくりをしていました。社会科を暗記の科目ではなく、教科書に載っていない資料などを積極的に活用して、生徒に考えさせる授業を行うことができたと考えます。

授業づくり以外にも、挨拶や時間を守るなど当たり前前することを当たり前に行うことの大切さも学ぶことができました。当たり前前に行うことで、他の先生方から信頼されるようになるだけでなく、教師自身が生徒の良いお手本となることができ、生徒からも信頼され、円滑に授業やクラス運営を行うことができました。

4. 後輩へ伝えたいこと

教育実習は、上手くいかないこともあると思いますが、何事にも積極的に全力で取り組んで欲しいと思います。積極的に生徒と関わることで、生徒と信頼関係が生まれ、生徒からの発言が増え、授業をより円滑に進めることができます。指導教諭の先生をはじめ、他の先生方とも積極的にコミュニケーションをとることで、授業に対してアドバイスをいただくことができ、より良い授業づくりに繋げることができます。授業以外の学校行事や部活動にも積極的に参加することで、他学年の生徒や普段の授業以上に生徒と関わることができ、学ぶことが多くあると思います。教材研究や授業の修正などで、実習中は非常に忙しいと思いますが、部活動や学校行事にも積極的に全力で取り組んで欲しいと思います。私は、大学卒業後にすぐに教師にはなりません、教育実習で得た経験は社会人として働くうえで必ず役に立つと考えています。後輩の皆さんには、何事にも積極的に全力で取り組むことを大切にして、有意義な教育実習にして欲しいと思います。

実習を通じて感じた教師のやりがい

国際関係学部国際関係学科 4 年

戸田 愛陽

1. 実習までの準備

教育実習の約一年前に実習校に連絡をし、打ち合わせを行う機会を設けていただきました。そこで実習校の先生方と顔合わせをしました。更に実習の一週間ほど前にも同様の打ち合わせをし、実習に向けて三週間の間の大まかな予定や、カリキュラム、担当学級、指導教諭を教えてくださいました。実習前は約半年ほどの間、担当する学年が不明だったため学年問わず中学英語の復習や、実習校が採用する教科書の構成などを把握しておき、使えそうな教材などを考えるという事を行っておりました。

2. 実習中の出来事

まず初めに実習中の一日の流れとしては7時50分頃に学校に行き、8時10分から朝の職員会議が行われます。そこで初日は教育実習生としての挨拶をしました。その後学年ごとの先生方での小会議を行い朝の会議は終了します。その後担当学級に向かい朝の会を進行させていただいております。そして授業が終わり放課後は部活を見に行ったり教材研究の時間として実習日誌の執筆、授業案の作成、教材の作成などを教科担当の先生と相談しながらおこなってまいりました。

実習一週目は学力テストがあった以外は通常の授業でした。一週目には自分は授業を行わないという事だったので、とにかくいろいろな先生の授業を参観し様々な授業方法を学び、自分が中学生の時になかったクロムブックやテレビ等ITを用いた授業に慣れるように励んでまいりました。そして授業が無くてでもできる事、生徒とのコミュニケーションなどを積極的に行っていました。

実習二週目から実際に授業を行いました。初回の授業はとても緊張したのですが、心配していたほどでもなく、途中から楽しいという感情を覚える程でした。ですが二回目以降から初回の授業がう

まくいってしまったために小さなミスも大きなものを感じてしまい中々自分が計画していた通りに行かない授業が続きました。そのなかで私の弱点に気づかされながら、そしてその弱点をカバーしつつ、授業を勧められるようにどうしたらよいかを考え、そして教科担当の先生に教わりアドバイスをもらいながら授業を行ってまいりました。担当学年が二年生だったのですが、教科担当の先生方が同様に指導している三年生の授業もおこなわせていただくことができました。また授業外では私の担当学年二年生が職場体験を実施し、私は現地巡視をする事が無かったのですが、職場体験の準備や発表などを総合の時間で行っていたため私も授業見学として関わらせてもらってまいりました。加えて生徒総会も二週目にあったため、そのために生徒が事前にクラスの意見を募り、体育館で全校生徒の前で質問や、意見を述べたりしている様子を見て生徒の新たな一面や頑張っている様子を見ることができたためとても感動してより一層生徒への思いが強くなる良い機会でした。

三週目には研究授業があったため、二週目のうちから通常の授業作成と並行しながら研究授業の細案の作成を行ってまいりました。研究授業は現在完了のプログラムのうち最後の時間だったため現在完了の文法すべてを一時間で復習することができる授業を作成しました。私の中では第一に英語を楽しみたいと感じてほしいというのが一つの軸としてあったため、座学で教師の一方通行の授業ではなく生徒が主体となってスピーキングを主にした授業を考え、かつ文法の総復習ができる授業を作成するのが本当に大変でした。ですがその私の意思を汲み取ってくださった教科担当の先生と一緒に考えてくださり助言をしてくださったおかげで無事授業をおえることができました。そして三週目のラスト二日間は1. 2年生の後期中間テストがあったため、三年生の授業が私の最後の授

業でした。最終日にはクラスの皆、そして担任の先生が私のために一時間時間を取ってくださりお別れ会をひらいてくれました。テスト期間だったのにもかかわらず手の込んだ色紙をプレゼントしてくれて、私のために歌まで歌ってくれたのですが、歌を歌っているとき、クラスの中であまり目立つような感じではなく一人であることが多かったため私が気にかけて話しかけていた一人の女子生徒が号泣してくれているのを見た瞬間私も号泣してしまい、最後のメッセージは大号泣していたため、大好きですとしか伝えることができませんでした。本当にうれしくて、実習が終わってしまうのが悲しくまだここにいたいと思わせてくれるような生徒たちでした。私の実習は本当に楽しいもので教師という職業の良さを存分に知ることができました。

更に実習中の大きな出来事として、私は通常学級での授業をおこないつつ以前から特別支援教育にも興味があったため、特別支援の学級にも積極的に関わりに行っていました。私の実習校は小さい学校だったので特別支援学級の生徒たちも五人ほどしかいなかったのですが、授業見学にいたり、自己紹介させてもらったりしていました。最初の方は抵抗があるような感じがしていましたが、学校で観たら必ず一言でも声をかける事をこころがけているうちに遠くからでも走って寄ってきてくれたり、趣味の話なども話してくれるようになりました。支援学級は通常の授業と違い、生徒一人一人の能力や個性にあった授業を行っているのでも勉強になりました。個々の能力を伸ばすという個別最適な授業についての考えが深まったと感じ、積極的に行動してよかったと感じます。

3. 実習を通して学んだこと

毎日夜八時近くまで残って本当に体力的にも大変だったのですが、それ以上に生徒たちと話して授業を行うのが楽しくてやりがいもあったため生徒たちのためだと考えれば夜遅いのも全然苦ではありませんでした。それほど私の中で生徒の存在が頑張ろうと思える活力になっていました。初回の授業では本当に緊張しすぎていましたが、授業が始まってすぐに私が考えた Warm-up をやっ

てもらったときの生徒たちの楽しそうな笑顔を見たら緊張なんてどうでもよくなって生徒の前では自然体でありのままの私で変に身構えて偽る必要なんてないんだと学ぶことができました。私の実習先は中学校でしたが、生徒たちは多分大人よりも人に対して敏感で、実習生が良く見せようと嘘をついて偽っていてもそれはお見通しなんだなというのが生徒と実際に関わっていく中で切に感じた部分であり、のままの自分で頑張れば必ず生徒に届くんだという事を学ばせてもらいました。

4. 後輩へ伝えたいこと

教育実習は教科担任ガチャだとか、様々なことが言われていますが、そういった自分以外の周囲の問題は少なからずあるにしろ、その教育実習を良い結果にも悪い結果にもするのは周りではなく自分自身がどうするかだと思います。たとえ授業がうまく進行しなくても全力でやっていたらその様子は生徒には絶対に伝わるし、それを見ている人は必ずいます。とにかく自分のできる一生懸命を出して頑張ることができれば必ず最後に何か得ることができると思います。最初はきついと思いますが生徒と積極的にしかかわる姿勢をもって楽しくやっていたら必ずそれがやりがいに繋がります。そして生徒たちは驚くほど毎日変化していて毎日刺激をもらえることに加えて、自分が頑張っただけ生徒たちは変わってくれるので生徒が成長していく様子が本当に嬉しくて頑張ってたよかったですと心から感じます。ぜひ生徒と沢山関わるとい事を念頭に置いて実習を行ってほしいと感じます。

私なりの教育実習

国際関係学部多文化コミュニケーション学科 4年

田口 茉依

1. 実習までの準備

教育実習の二週間前に一度、指導教諭と一对一の事前準備をしていただいた。その事前指導では、大学卒業後すぐに教壇に立つ予定があるか、自分自身がどのぐらいの量の授業を持ちたいかをまず確認された。自分は卒業後すぐに教壇に立つつもりはなかったが、何事も経験になると思い、できるだけ多くの授業を持てればというお話をさせていただき、指導教諭が持っている授業全てを担当することになった。その後、指導教員がどのような授業方法をとっているか、使用教材、授業範囲、担当クラスの確認など、授業をする上で基本的なところを確認した。また、翌週に全体の事前指導があり、教育実習生として注意することや生活の流れなどを説明していただいた。実習までは、事前に確認した授業内容について教材研究を行い、単語や文法を改めて調べ、重要事項をまとめたり、授業展開を大まかに決めたりなどしていることが多かった。

2. 実習中の出来事

実習一週目は中間考査と被っていたため、一週間まるまる授業準備に充てることができた。その期間は授業で使用するスライドの作成、細かな授業構成の作成、簡略の指導案の作成などデスクワークをしていることがほとんどだった。考査期間は生徒も早く帰宅したため、午後は指導教員とともに授業準備や実際に板書・スライド投影練習に励んでいた。

実習二週目から実際に教壇に立ち、授業を行なった。実習最終日に合唱祭があったため二週目後半から特別時間割に変更になったこともあり、普段より授業時間が短くなり、短い時間の中でどのように授業を進めていくかが一番苦戦した。また、研究授業では、事前に別のクラスで同じ内容を練習することができたため、本番の研究授業では時間内にやるべきことを終わらせることができ、見

に来ていただいた教員の方々からも良かったと褒めていただくことができたため、満足のいく授業をすることができた。

授業外でも生徒と関わりを持つことを重要視した。高校時代に所属していた部活に指導へ行ったり、合唱祭の練習を見学したりするなど学年を超えて生徒と関わるすることができた。最終日には担任を持ったクラスの生徒たちから写真付きの色紙とメッセージカードをいただき、生徒から教員として認めてもらえたようで嬉しかった。

3. 実習を通して学んだこと

実習を通して、教員という仕事は教員一人で成り立つことはないということである。実習中、本当にたくさんの人に助けをもらいながら授業を作ることができた。実習生ということもあり、指導教員には授業づくりや教室運営、生徒との関わり方など様々な基礎的な部分を学ぶことができた。しかしそれだけではなく、教育実習生同士で実習期間中に精神面で助けをもらったり、担当した生徒から授業を円滑に進めるために助けをもらったり、大学の担当教員に相談をして助けをもらったりとたくさんの人の助けがあったからこそ教育実習がうまくいったと考える。たくさんの人が教育に関わっているからこそ、自分一人で全てを完結するのではなく、様々な人と関わりながら進めていくことの大切さを学ぶことができた。そのためにも人とのコミュニケーションを円滑にすることや周りを見て行動することなど、社会に出ても重要であるスキルが必要であり、そのスキルを、実習を通じて身につけることができたと思う。

4. 後輩へ伝えたいこと

教育実習中は、常に自主的で積極的な行動が求められる。そのため、指示待ちになるのではなく、聞きたいことや困ったことがあればすぐに行動に移すべきであり、むしろ「〇〇してもいいですか」

と提案ベースで聞くことが大切になってくると思
う。また、タイムマネジメントをしっかりするこ
とが重要だ。実習期間は2～3週間と短く、授業準
備や教材研究にたくさん時間を割くことができな
いので、空いた時間を有効的に使うことや事前に
準備を少しずつしておくことで、心と行動に余裕
ができる。中には実習期間中に就職活動を両立し
なければいけない場合も出てくるので、スケジ
ュール管理やタイムマネジメントは普段以上に頑張
るべきだと思う。

大変なことや苦痛に思うこともたくさんある一
方で、教育実習に行ったからこそ学べたことや身
につけられたスキル、知識もたくさんある。短い
時間だからこそ、後輩の皆さんには教育実習を有
意義な時間にしてほしい。

大学唯一の商業科

経営学部経営学科 4 年

竜崎 剛熙

1. 実習までの準備

教育実習の約1ヶ月前に、実習校で教育実習の打ち合わせをした。指導教諭、担当学年、担当科目・範囲などが発表され、最後に担当範囲の教科書のコピーと計画表をいただき、30分ほどで終了した。その後の1ヶ月はとにかく授業の準備。実際に声を出して1人で練習をしたり、友達を頼って模擬授業を行った。授業の準備では、高校時代の教科書やノートも参考にした。図書館で分からない部分を勉強したこともあった。生徒はどれくらい内容の理解をしているのかが分からない。また、書くスピード、タブレットに打ち込むスピードが分からず不安が大きかった。

2. 実習中の出来事

商業科の教員免許のみ取得のため、実習期間は2週間であった。実習期間中には体育祭が予定され、学校行事にも参加することができた。

1週目は、基本的に授業参観。自分の担当教科や科目の授業を中心に、教育方法を学ぶとともに生徒観も感じとる時間として参観した。黒板を使用する教諭、ICTのみの教諭、教科書を一切使用せず生徒たちで授業を作るような授業を行っている教諭など様々な指導を見学できた。

2週目からは本格的に授業を行った。商業科の授業の多くは選択科目であったため、毎回生徒が変わり、名前と顔を覚えるのが大変だった。学年によってスピード感や生徒観が大きく異なる。学年ごとに、問いかけやスライドの作り方を変えた。また、授業後に必ず指導教諭からアドバイスを頂いたので、素直に受け入れて研究授業に挑んだ。

休み時間や体育祭などの学校行事で深く生徒と関わりコミュニケーションがとれた。実習期間を充実させるには、生徒とのコミュニケーションは必須になる。

3. 実習を通して学んだこと

今回の実習で学んだことは、「授業は知識を話す

場所ではない」ということだ。そんなこと実習前から分かっていたらと思うだろうが、教壇に立てば分かる。教壇に立つと授業をすることに必死になり、「授業で知識を話す」ことがゴールになっていると痛感をした。「知らない人に伝える」ことを重視し、頷きや表情の変化など、些細な反応を意識して授業を行った。また、信頼関係がなければ、生徒も反応が薄くなる。授業外でもコミュニケーションを沢山とり信頼関係を築く。そうして、教師と生徒の両方で授業を作り上げられる。

4. 後輩へ伝えたいこと

＜実習前＞

・打ち合わせ段階で持ち物は必ず聞いた方がよい。パソコンは持ち込めるか、Wi-Fiは使用できるか、など授業に関わる持ち物は必ず聞いた方がいい。

＜実習中＞

・授業参観は貴重な経験ではあるが、真似をしようとする指導方法は変更しない方がいい。大学で体験した模擬授業の授業方法と自分自身を信じて授業を行う方がいい。

・トラブルは付きもの。焦らず冷静に。

・ICTで授業を行う場合、資料が生徒に届いているか授業前にチェックをした方がいい。また、タブレットなどを忘れた生徒用に、数枚はプリントを用意するとスムーズに授業が行える。

伝えたいことは沢山あるが、最後に一番大切なことを伝えたいと思う。それは「準備の大切さ」だ。教育実習は、前後を含めて全てで準備が大切になる。準備が出来ていなければ実習中が忙しくなり良いパフォーマンスができない。計画を立ててしっかり準備をすることが大切になる。

また、授業は失敗をしても1時間で必ず終わる。しかし、実習生が失敗した1時間は、生徒にとっては無駄になった1時間となってしまう。お互いが有意義になるよう、しっかりと準備をしてほしい。

大変なことや不安も多いと思うが、あっという間に実習は終わってしまう。良い緊張感を持ちながら楽しんで教育実習を行なってほしい。
頑張ってください！！

令和4(2022)年度 課程登録者(秋学期)

◇教職課程登録者数(春学期合計)

区 分	1年	2年	3年	4年	合計
	総 数	総 数	総 数	総 数	総 数
経営学部 経営学科	7	10	5	7	29
経済学部 経済学科	9	4	4	6	23
法学部 法律学科	16	22	10	22	70
国際関係学部 国際関係学科(社会)	2	5	2	5	14
国際関係学部 国際関係学科(英語)	8	10	6	9	33
国際関係学部 多文化コミュニケーション学科(社会)	2	3	1	0	6
国際関係学部 多文化コミュニケーション学科(英語)	1	2	1	1	5
大学合計	45	56	29	50	180

◇図書館学課程登録者数(春学期合計)

区 分	1年	2年	3年	4年	合計
	総 数	総 数	総 数	総 数	総 数
経営学部 経営学科	3	0	3	3	9
経営学部 ホスピタリティ・マネジメント学科	1	0	0	0	1
経済学部 経済学科	3	3	3	1	10
法学部 法律学科	5	3	2	1	11
国際関係学部 国際関係学科	0	2	1	4	7
国際関係学部 多文化コミュニケーション学科	12	0	6	2	20
都市創造学部 都市創造学科	0	2	2	1	5
大学合計	24	10	17	12	63

◇社会教育主事課程登録者数(春学期合計)

区 分	1年	2年	3年	4年	合計
	総 数	総 数	総 数	総 数	総 数
経営学部 経営学科	1	0	0	0	1
経営学部 ホスピタリティ・マネジメント学科	0	0	0	0	0
経済学部 経済学科	2	0	0	0	2
法学部 法律学科	1	0	1	0	2
国際関係学部 国際関係学科	0	1	1	0	2
国際関係学部 多文化コミュニケーション学科	0	2	1	1	4
都市創造学部 都市創造学科	2	0	1	1	4
大学合計	6	3	4	2	15

【2022年度資格取得者数】

【教育職員免許状一括申請授与件数】

学校種	教科	経営学部	経済学部	法学部	国際関係学部	科目等履修生	合計
中学校1種	社会	3	4	18	4	0	29
	英語				9	0	9
高等学校1種	公民	5	6	22	4	0	37
	商業	1				0	1
	英語				9	0	9
合計		9	10	40	26	0	85

【司書教諭資格申請予定者】

経営学部	経済学部	法学部	国際関係学部	科目等履修生	合計
1	1	5	5	0	12

【司書資格取得者】

経営学部	経済学部	法学部	国際関係学部	都市創造学部	科目等履修生	合計
2	1	0	5	1	0	9

【社会教育主事課程修了者】※「社会教育士」称号付与

経営学部	経済学部	法学部	国際関係学部	都市創造学部	科目等履修生	合計
0	0	0	1	1	0	2

【2022年度介護等体験活動実施状況】

特別支援学校(2日間)

学校名	経営学部	経済学部	法学部	国際関係学部	科目等履修生	合計
都立小金井特別支援学校	3	2	6	7	0	18

社会福祉施設(5日間)

	経営学部	経済学部	法学部	国際関係学部	科目等履修生	合計
代替措置適用(実習中止)	2	1	3	2	0	8
施設実習者	1	1	3	5	0	10

【実習施設名】介護予防クラブLOCO、デイホームゆりの木 江戸川、高齢者在宅サービスセンター シャローム南沢、特別養護老人ホーム 栄光の杜、デイサービスセンター クレイン、木の葉クラブ、第二南陽園在宅サービスセンター、第二南陽園在宅サービスセンター、東京清風園 高齢者在宅サービスセンター、ジョブ・サポート・プラザ ちよだ

社会教育主事課程

【2022年度社会教育実習実施状況】

施設名	経営学部	経済学部	法学部	国際関係学部	都市創造学部	合計
国立赤城青少年交流の家	0	0	0	1	1	2
西東京市市民活動推進センター	0	0	0	1	0	1

2022年度 教育実習先・実習科目一覧

都道府県	実習校名	実習校住所	教科
東京都	品川女子学院	東京都品川区	社会科・公民科
北海道	旭川大学高等学校	北海道旭川市	政治・経済
岩手県	盛岡市立見前南中学校	岩手県盛岡市	社会科
栃木県	文星芸術大学附属中学校	栃木県宇都宮市	社会科（公民）
栃木県	栃木県立さくら清修高等学校	栃木県さくら市	英語
群馬県	伊勢崎市立境北中学校	群馬県伊勢崎市	社会科
埼玉県	埼玉県立所沢中央高等学校	埼玉県所沢市	公民科
埼玉県	埼玉県立上尾高等学校	埼玉県上尾市	商業
埼玉県	志木市立宗岡中学校	埼玉県志木市	社会科
埼玉県	埼玉県立大宮東高等学校	埼玉県さいたま市	社会
埼玉県	さいたま市立田島中学校	埼玉県さいたま市	社会科
埼玉県	埼玉県立大宮東高等学校	埼玉県さいたま市	社会
埼玉県	埼玉県立飯能高等学校	埼玉県飯能市	政治・経済
埼玉県	所沢市立狭山ヶ丘中学校	埼玉県所沢市	社会
埼玉県	埼玉県立鷲宮高等学校	埼玉県久喜市	公民
埼玉県	坂戸市立桜中学校	埼玉県坂戸市	社会科
埼玉県	埼玉県立朝霞西高等学校	埼玉県朝霞市	地歴科
埼玉県	叡明高等学校	埼玉県越谷市	英語
千葉県	船橋市立三田中学校	千葉県船橋市	社会
千葉県	千葉県立船橋二和高等学校	千葉県船橋市	公民（現代社会）
千葉県	習志野市立習志野高等学校	千葉県習志野市	公民
千葉県	千葉県鎌ヶ谷市立鎌ヶ谷中学校	千葉県鎌ヶ谷市	社会科
千葉県	船橋市立法田中学校	千葉県船橋市	社会科
東京都	日本学園高等学校	東京都世田谷区	公民
東京都	足立学園高等学校	東京都足立区	地歴公民科または中学社会科
東京都	東京都立芦花高等学校	東京都世田谷区	公民
東京都	八王子実践高等学校	東京都八王子市	地歴公民科
東京都	東久留米市立西中学校	東京都東久留米市	社会
東京都	東大和市立第二中学校	東京都東大和市	社会
東京都	府中市立府中第六中学校	東京都府中市	社会
東京都	堀越高等学校	東京都中野区	公民
東京都	武蔵野市立第一中学校	東京都武蔵野市	社会
東京都	墨田区立吾嬭第二中学校	東京都墨田区	英語
東京都	足立区立第十一中学校	東京都足立区	英語
東京都	立川市立立川第八中学校	東京都立川市	英語
東京都	東京都立東高等学校	東京都江東区	英語
東京都	奥多摩町立奥多摩中学校	東京都西多摩郡	英語
神奈川県	川崎市立宮内中学校	神奈川県川崎市	社会
神奈川県	川崎市立御幸中学校	神奈川県川崎市	社会科
神奈川県	神奈川県立新栄高等学校	神奈川県横浜市	英語科
富山県	富山県立富山北部高等学校	富山県富山市	英語
静岡県	加藤学園高等学校	静岡県沼津市	公民（現代社会）
大阪府	豊中市立第三中学校	大阪府豊中市	社会科
徳島県	生光学園高等学校	徳島県徳島市	公民
高知県	高知高等学校	高知県高知市	社会科
大分県	柳ヶ浦高等学校	大分県宇佐市	公民
宮崎県	延岡市立東海中学校	宮崎県延岡市	社会科
宮崎県	宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校	宮崎県都城市	公民（政治経済）
鹿児島県	樟南高等学校	鹿児島県鹿児島市	政治・経済（公民）

卒業生進路一覧

就職年度	卒業年度	学部	就職先	職名	教科
平成30年度	平29	経営学部	富山第一高等学校	非常勤	公民
	平29	経営学部	育英高等学校	非常勤	公民
	平29	法学部	名護市立大宮中学校	臨時任用	公民
	平29	国際関係学部	読谷村立読谷中学校	特別支援教育支援員	英語
	平26	経営学部	横浜市立みなと総合高校	専任	商業
	平26	経営学部	北海道高等学校	専任	商業
	平21	国際関係学部	新潟小学校	非常勤	
	平18	法学部	富島高等学校(宮崎県)	常勤	公民
令和元年度	平30	経営学部	船橋市立船橋特別支援学校	臨時任用	
	平30	経営学部	東京都立農業高等学校(定時制課程)	専任	地理歴史
	平30	経営学部	埼玉県上尾市立東中学校	臨時任用	社会
	平30	経営学部	私立関根学園高等学校	常勤講師	公民
	平30	経済学部	神奈川県立茅ヶ崎養護学校	臨時任用	特別支援
	平30	経済学部	私立山村国際高等学校	非常勤	公民
	平30	経済学部	千葉県習志野市立第二中学校	臨時任用	社会
	平30	法学部	福島県会津若松市立一箕中学校	臨時任用	社会
	平30	国際関係学部	千葉県匝瑳市立第二中学校	常勤講師	英語
	平28	法学部	長崎県立鶴洋高等学校	非常勤	体育
	平27	法学部	埼玉県小学校教員	専任	
	平25	経営学部	東京都小学校教員	専任	
	平24	経済学部	広島県庄原市立東城中学校(特別支援学級)	臨時任用	
令和2年度	令1	経営学部	埼玉県富士見市立西中学校	臨時任用	社会・特支
	令1	経済学部	東京都墨田区立文花中学校	専任	社会
	令1	経済学部	八千代市立大和田中学校	常勤講師	社会
	令1	法学部	我孫子市立湖北中学校	臨時任用	公民
	令1	法学部	相模原市立弥栄中学校	常勤講師	社会
	令1	法学部	浜名市立浜名中学校	臨時任用	社会
令和3年度	令2	経営学部	東海大学菅生高等学校	非常勤	公民
	令2	経営学部	白鵬女子高等学校	専任	公民
	令2	経営学部	山梨県立富士北陵高等学校	常勤講師	商業
	令2	経営学部	入間市立黒須小学校	専任	小学校
	令2	経済学部	市川市立第一中学校	臨時任用	社会
	令2	経済学部	川越市立初雁中学校	臨時任用	社会
	令2	経済学部	尾道中学校・高等学校	期限付き	公民
	令2	法学部	桐生第一高等学校	委託職員	公民
	令2	法学部	市川市立第七中学校	臨時任用	社会
	令2	国際関係学部	いわき市立湯本第三中学校	臨時任用	英語
	令2	国際関係学部	千葉県立松戸高等学校	臨時任用	英語
	令2	国際関係学部	東京都昭島市立清泉中学校	専任	英語

卒業生進路一覧

	令1	経営学部	東京都立八王子盲学校	臨時任用	社会
	令1	法学部	我孫子市立湖北中学校	専任	公民
	平30	経営学部	習志野市立第五中学校	専任	社会
	平30	経営学部	私立関根学園高等学校	専任	公民
	平30	経営学部	習志野市立第五中学校	専任	社会
	平30	経営学部	私立関根学園高等学校	専任	地歴公民
	平29	国際関係学部	東京学芸大学附属小金井中学校	専任	英語
	平29	経営学部	所沢商業高等学校	臨時任用	商業
	平27	経営学部	明秀学園日立高等学校	常勤	社会公民地歴
令和4年度	令3	経営学部	山村国際高等学校	専任	公民
	令3	経済学部	松戸市立八ヶ崎第二小学校	臨時任用	
	令3	経済学部	開新高等学校	常勤講師	公民
	令3	法学部	前橋市立前橋特別支援学校	臨時任用	
	令3	法学部	東村山市立新宿小学校	臨時任用	
	令3	法学部	松戸市立根木内小学校	臨時任用	
	令3	法学部	興國高等学校	非常勤	公民
	令3	国際関係学部	潤徳女子学園高等学校	非常勤	英語
	令3	国際関係学部	大阪学芸高等学校	常勤講師	英語
	令2	経営学部	松戸市立稔台小学校	臨時任用	小学校
	令2	国際関係学部	松戸市立松戸第二中学校	臨時任用	英語
	令1	経営学部	東京都立八王子盲学校	専任	社会
	令1	経済学部	川崎市立金程中学校	非常勤	社会
	平29	経済学部	千葉経済高等学校	非常勤	地歴公民
	平24	経済学部	広島県三次市中学校	臨時任用	社会
	令和5年度	令4	経営学部	池田市立北豊島中学校	常勤講師
令4		経営学部	私立柳ヶ浦高等学校	専任	公民
令4		法学部	船橋市立船橋特別支援学校(金堀校舎)高等部	臨時任用	
令4		法学部	早稲田学園わせがく高等学校	常勤講師	公民(公共)
令4		法学部	翔徳学園翔徳中学校・高等学校	非常勤講師	社会
令4		国際関係学部	栃木県立高根沢高等学校	常勤講師	英語
令4		国際関係学部	富山市立上滝中学校	専任	英語
令3		経営学部	埼玉県立高麗川中学校	常勤講師	社会
令3		法学部	東大和市立第五小学校	臨時任用	
令2		経営学部	名古屋市立天神山中学校	臨時任用	社会
令1		経済学部	川崎市立金程中学校	専任	社会
平29		経営学部	狭山経済高等学校	専任	商業
平28		国際関係学部	和光南特別支援学校	専任	特別支援

2022年度 課程科目担当者一覧

役 職	氏 名	主な担当科目	備 考
教授（主任）	板垣 文彦	教育心理学、職業指導、他	
准教授（主任補佐）	池亀 直子	教職入門、教育原理、他	
教授	安形 輝	図書館概論、図書館情報技術論、他	
教授	秋月 弘子	法学概論、他	
教授	江川美紀夫	経済学概論	
教授	奥井 智之	社会学概説	
教授	ターナー、フィルト、ピーター	英米文学 I（教職）、他	
教授	千波 玲子	英語科教育法、他	
教授	長田 秀一	情報資源組織論、情報資源組織演習 I、他	
特任教授	大久保 俊輝	特別活動論、生徒・進路指導論、他	
准教授	青山 治世	外国史概説、他	
准教授	今津 敏晃	日本史概説、他	
准教授	東浦 拓郎	体育科目（体育主任）	
准教授	藤岡 大助	政治学原論	
准教授	藤村 希	英語文学 II	
准教授	三浦 朋子	教職入門、社会科教育法 I・II、他	
講師	八谷 舞	外国史概説、他	
客員准教授	橋本 一郎	特別支援教育概論	
講師	奥山 亜喜子	暮らしのなかの憲法、法学概論（教職）	
講師	狩野 真規	地理学概説	
講師	小林 惇道	宗教学概説	
講師	櫻井 歆	道徳教育の理論と実践	
講師	佐藤 玲子	英語科教育法 I・II	
講師	菅谷 幸浩	政治学概論（教職）、他	
講師	館 潤二	総合的な学習の時間の指導法	
講師	丹 一信	図書館情報資源概論、図書館情報資源特論	
講師	利根川 樹美子	図書館サービス論、図書館制度・経営論	
講師	中島 玲子	情報サービス演習他	
講師	中根 伸二	教育相談	
講師	中山 美由紀	児童サービス論、読書と豊かな人間性	
講師	並木 通男	商業科教育法、商業概説	
講師	庭井 史絵	学校経営と学校図書館、他	
講師	橋本 洋光	教育実習指導、教育方法学	
講師	長谷川 啓介	社会学概説	
講師	畑 和樹	英語学	
講師	平澤 孝一	教育相談	
講師	松橋 義樹	生涯学習概論	
講師	松村 純子	社会教育特講	
講師	元木 靖則	教育課程論	
講師	森 晴代	音声学	
講師	山田 徹	地誌学概説	
講師	山本 剛史	倫理学概説	
講師	山本 裕一	社会教育演習、社会教育計画	

課程運営連絡協議会記録

第1回 課程運営連絡協議会

日時：令和4年5月24日（火）12：35～12：50

場所：オンライン会議（Zoom）

【審議事項】

1. 令和4年度 教育実習巡回視察について
2. 教職4年生のAUAP参加について

【報告事項】

1. 令和4年度 課程履修者の状況について
2. 特任教員採用の状況について
3. 『亜細亜大学課程教育研究紀要』の刊行及び原稿募集について
4. 教員採用受験者への指導について

第2回（臨時）課程運営連絡協議会

日時：令和4年6月21日（火）12：35～12：45

場所：オンライン会議（Zoom）

【審議事項】

1. 令和4年度 教職課程における自己点検の方針と作業について

【報告事項】

1. 令和4年度課程運営連絡協議会構成員一覧の修正について
2. 令和4年度課程履修者の状況の修正について

第3回 課程運営連絡協議会

日時：令和4年9月27日（火）10：00～10：40

場所：オンライン会議（Zoom）

【審議事項】

1. 令和5年度特任教授・非常勤講師の採用及び資格審査について
2. データサイエンス学科における新課程の設置について

【報告事項】

1. 教育実習実施状況の確認（9月以降）
2. 教職課程「介護等体験」の状況について
3. 社会教育主事課程「社会教育実践演習」の実習について
4. 秋学期の課程履修者の登録状況について
5. 教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令の公布について
6. 自己点検について
7. 教育実習報告会の実施について
8. その他

第4回 課程運営連絡協議会

日時：令和4年11月29日（火）12：35～13：05

場所：オンライン会議（Zoom）

【審議事項】

1. 令和5年度カリキュラム及び担当者について
2. 令和5年度非常勤講師の採用及び資格審査について

【報告事項】

1. 令和4年度秋学期 受講者0名科目について
2. 令和5年度オンデマンド科目の申請について

第5回 課程運営連絡協議会

日時：令和4年12月20日（火） 12：35～12：57

場所：オンライン会議（Zoom）

【審議事項】

1. 令和5年度非常勤講師の採用及び資格審査について

【報告事項】

1. 教育実習成果発表会の実施について
2. その他

第6回 課程運営連絡協議会（判定会議）

日時：令和5年2月24日（金） 16：00～16：30

場所：244教室

【審議事項】

1. 令和4年度 各課程の資格取得の判定について
2. 令和4年度 各課程代表者決定について
3. 令和5年度科目担当者の交代について
4. 令和5年度非常勤講師の採用及び資格審査について
5. 科目の趣旨の変更について
6. 役職者の改選について
7. 自己評価報告書の外部評価について

【報告事項】

1. 明星大学教育業務提携による出願者の決定について
2. 課程担当者打ち合わせ会について

『亜細亜大学課程教育研究紀要』刊行規程

(目的及び名称)

1 課程教育関係科目を担当する教員の研究成果と教育実践を公表し、また、課程学習に関する諸活動を報告することにより、本学の課程教育の充実に寄与するため、『亜細亜大学課程教育研究紀要』(以下「本誌」という)を刊行する。

(編集委員会)

2 本誌を編集・刊行するために必要な事項を審議するため、編集委員会を置く。編集委員は、課程運営連絡協議会の議を経て、課程の専任教員から選出し、編集委員長は互選とする。編集委員の任期は2年とする。ただし、重任を妨げない。

(発行者、刊行回数及び時期)

3 本誌の発行者は「亜細亜大学教職課程・図書館学課程・社会教育主事課程」とする。刊行は年1回とし、原則として、9月とする。

(原稿の種類)

4 本誌に掲載する原稿は次の通りとする。

1. 研究論文
2. 教育実践報告
3. 研究ノート
4. 研究資料
5. 履修生体験記録
6. 課程活動報告
7. 課程基礎データ及び資料
8. その他

(原稿の採否)

5 研究論文及び教育実践報告については、編集委員会が選任する査読者の査読報告をもとに、編集委員会が採否を決定する。履修生体験記録は編集委員会が執筆者を選定する。

(投稿資格)

6 研究論文、教育実践報告、研究ノートの投稿ができる者は、課程教育関係科目を担当する教員(非常勤講師を含む)及び、その他、編集委員会が適当と認めた者とする。

(投稿規定)

7 投稿規定は別に定める。

(原稿料)

8 原稿料は支給しない。

(原稿に関する諸権利)

9 本誌に掲載した原稿の執筆者は、亜細亜大学に対して、当該原稿に関する著作権、複製権、公衆送信権行使を許諾したものとする。

付則 この規定は2013年2月25日より施行する。

2 この規定は2018年5月7日より施行する。

『亜細亜大学課程教育研究紀要』投稿規程

(原稿の締め切り)

- 1 投稿原稿は原則として刊行年の5月15日までに編集委員会に提出するものとする。その他の原稿は編集委員会が執筆者に連絡した期日までに提出する。

(原稿の字数・語数)

- 2 研究論文は邦文で2万字程度(英文の場合は4千語程度)、教育実践報告及び研究ノートは邦文で1万字程度(英文の場合は2千語程度)とする。その他の原稿は編集委員会が執筆者に連絡した字数(語数)とする。図表・写真は白黒とし、占有するスペースを字数・語数に換算して調整するものとする。

(超過分の経費請求)

- 3 上記の標準字数(語数)を大幅に超えた場合、超過分の経費を著者に請求することがある。

(英文タイトルなど)

- 4 邦文投稿原稿には英文のタイトルと著者氏名を付けて提出するものとする。また、英文要旨を付けることができる。

(原稿提出方法)

- 5 印刷原稿2部のほか、電子媒体(CD-ROM やUSB等)を提出するものとする。電子媒体は編集終了後返却する。

(校正)

- 6 著者校正は原則として初校のみとする。

(その他)

- 7 その他、編集上必要な事柄は編集委員会で審議して決める。

編集委員

安形 輝 (経営学部教授・委員長)

池亀 直子 (国際関係学部准教授)

野口 康人 (経営学部准教授)

亜細亜大学課程教育研究紀要 第 11 号

2024 年 3 月 31 日 発行

編集者 亜細亜大学課程研究紀要編集委員会

発行者 亜細亜大学教職課程・図書館学課程
・社会教育主事課程

製作者 亜細亜大学課程研究紀要編集委員会

Bulletin of the Teacher Training Course, Asia University

Vol.11, 2023

【Review】

Review of “TAKEO MIKI and Post-war Politics”

Authored by Kei Takeuchi Yukihiro SUGAYA1

【Activities Report】

Practice of Librarian (1) Mari AOKI9

Practice of Librarian (2) Mahiro SATO 10

Social Education Practice (1)Kazune KISHIMOTO 11

Social Education Practice (2)Chizuru KATO 12

Teaching Practice (1) Social Studies Daiki HARADA 13

Teaching Practice (2) CivicsShun SAKOOKA 15

Teaching Practice (3) Social StudiesNaoki AZUMA 16

Teaching Practice (4) Social StudiesMahiru TODA 18

Teaching Practice (5) English Mai TANIGUCHI 20

Teaching Practice (6) BusinessMasayoshi RYUZAKI 22

【Data on Teacher Programs】 24

【Regulation for Publishing and Contribution Rules】 33